

聞き手知識を前提とする「ナニ」の機能について

——ナンダカラ、ナンダッタラ、ナンナラ、ナンダガを例に——

竹内直也

1. はじめに

本稿は尾上 (1983)¹ で指摘されている「定対象指示用法」の「ナニ (口語では「ナン」)」を指示的性質から考察するものである。いわゆる不定語² と呼ばれる語群は不定対象を指し示す語群であるため、その語群自体には定対象を指し示す機能はないが、例外的に「なに」は、具体的対象を指し示す「定対象指示用法」の「なに」があることが尾上 (1983) で指摘されている。

(1) A: 今日、飲みに行かない。

B: 明日も飲むし、今日は何だからやめとくよ。(作例)

(2) A: どーしよー、明日の発表準備、何もできてないよー。

B: 何だったら、少し手伝おうか? (作例)

これらの例は不定対象を示すとは言い難く、前文の内容を受けていると考えられる。「定対象指示用法」の「なに」はこのような点で、他の不定語とは性質を異にし、指示詞「ソ・ア」系列と似たようなふるまいをするが、これらの例を置き換えたとしても、決して同一の意味を有さない。

(1') A: 今日、飲みに行かない。

B: 明日も飲むし、今日は {何だから/あれだから/?それだから} やめとくよ。

(2') A: どーしよー、明日の発表準備、何もできてないよー。

B: {何だったら/それだったら/あれだったら}、少し手伝おうか?

1'の場合、「ア」を選択するなら、「君もわかるよね」というような共有認識を前提とした発話であり、「それだから」では前に述べた「明日も飲む」ということばを受けていると判断される³。2'も同様に、「ソ」の場合は相手の発言内容を受けていて、「ア」の場合は「発表準備は大変で何もできていないのであれば、手伝わなければ終わらない」という推論が働き「ア」が選択される。これらの指示性の違いはどのようなものであろうか。

(52)

本稿では定対象指示用法を確認したのち、指示詞「ソ・ア」の基本的な機能を概観する。そして「ナニ」が用いられる用法について検討し、指示詞の機能との類似性及び相違点を検討する。

なお、ここで現れる「ナニ」は音声上平板化されるという特徴があるが、本稿では音声の特徴は取り上げない。また本稿で扱う「ナニ」は話しことばで「ナン」と発音されるもののみ扱うが、表記上「ナニ」と表すことにする。

2. 定対象指示用法について

2. 1. 尾上 (1983)

定対象指示用法は尾上 (1983) の用語であり、このような「ナニ」の用法について指摘・言及しているのも管見の限り尾上 (1983) のみである。以下、尾上 (1983) について拙稿 (2005: pp. 72-73) でまとめたものをもとに検討する。

尾上 (1983) では、不定語の語性と用法から、「特定・明確化志向系の用法」と「特定・明確化不志向系の用法」という大分類に分け、不定語を9類21種に分類している。その中で注目するのは [β] 特定・明確化不志向系、[β2] 特定不要対象指示型の (I) 「某」項指示用法についてである。尾上 (1983) では「『某』項指示用法」について以下のようにまとめている。

(前略)「特定を目指さないという姿勢をもって空欄を対象的に指示する」という用法がある。用法類型として [β・2] 特定不要対象指示用法と呼ぶべきものであって、用法名としては (I) 「某」項指示用法と名付けるが、この用法には二つのタイプが区別されるであろう。(尾上 (2001) p. 154、下線は筆者)

ここで尾上は、「特定を目指さない」という点で指示語とは異なるが、不定語の中にも「空間を対象的に指示する」という指示の用法がある点を認めている。そして、この用法を〈引用中「某」項指示用法〉と〈定対象指示用法〉の二つに分けている⁴。

〈定対象指示用法〉 現代語文型〔特に文型制限なし〕

○ナンでしたら、私の方から参りますが……

○一度社長に相談してナニしましてから改めてうかがいます。

○うちのナニが文句をいいますので……

○この人うちのナニ (情夫) ですねん。

言う必要のないほど分かりきっている対象 (名詞項目あるいは動作内容) や、詳しく説明すれば繁雑になるが言わなくても大略は了解できるというような事態内容を「ナニ」で指示する用法である。わざわざことばで特定することを嫌って、あるいは省いてのことである (尾上 (2001) pp. 154-155)

この用法は、「不定語が「某」という不定対象 (実は内容不明な定対象) を指示する

だけというような用法」(尾上(2001) p. 155)であり、「指示」という点で、他の不定語とはやや異なるふるまいを見せる点に注目できる。

2. 2. 問題点

尾上(1983)は上記の「ナニ」を指摘した点、およびその機能について言及した点で注目できるが、その分類についてはまだ検討の余地が残る。尾上(1983)で分類された「ナニ」は「言わずともわかる」というものと、直接具体的なものを指し示すものが同じ組上で扱われているのである。先の引用を再掲載すると、(3)は前者で、(4)～(6)は後者に当たる。

(3) ナンでしたら、私の方から参りますが……

(4) 一度社長に相談してナニしましてから改めてうかがいます。

(5) うちのナニが文句をいいますので……

(6) この人うちのナニ (情夫) ですねん。(尾上(2001) p. 155 下線は筆者)

これらをふまえ、拙稿(2005)では(3)～(6)について、その機能を「隠語的性質」として、その使用条件として以下の3点が守られていることを指摘した。

1；概念的な指示物を有しながらそれを直接指し示さないもの

2；直接言うことがはばかれるもの

3；共通理解があるもの(拙稿(2005) p. 72)

また、その使用場面として、「直接言うことがはばかれる場面」、「マイナスのイメージが伴うようなものごとを言う場面」と規定し、相手との共通理解を前提とするア系列指示詞との類似点および相違点を指摘した。そしてア系列指示詞との違いを以下のようにまとめた。

現場指示用法を持たない点、観念指示でも置き換えられないものがある点から、ア系列とは異なり、やはり基本的性質は「隠語的性質」であるといえる。(拙稿(2005) p. 78)

しかし、拙稿(2005)では(3)～(6)の用法を分けることなく一括して扱ってしまい、口語で「ナン」と発音され、「～だから」などと共起する「ナニ」まで同一の機能としてしまっている。拙稿での結論は直接誰かを指し示す(4)から(6)のみに当てはまるものであろう。修正したい。

また、(3)のような例まで「定対象指示」と言えるかどうかが問題である。(4)から(6)のような「ナニ」は直接的ではないが、ある人物や対象を指し示すという点で「定対象」ということができるが、(3)の「ナニ」で指し示すものは具体的な事物とは言えない。むしろ、「言わずともわかる」というようなものごとである。つまり相手に察してもらうことを前提とした用法ということができただろう。本稿ではこれらの性質を鑑みて、便宜上「聞き手知識前提用法」と名付ける。

(54)

本稿で扱う「ナニ」は(3)のような聞き手知識前提用法に限定して考察を進める。

3. 「ナニ」の「聞き手知識前提用法」について

ここで聞き手知識前提用法に分類される「ナニ」について検討していく。聞き手知識前提用法のナニは決まった形で現れることが多いため、個別に前件と後件との意味関係、「ナニ」で表す内容の検討、および指示語との置き換えテストを行い、その機能的特徴を抽出していく。そして最後に「ナニ」全般に共通する機能を検討する。

聞き手前提指示用法の「ナニ」には「ナングカラ／ナンナノデ、ナングッタラ、ナンナラ⁵」のほかに、「ナングガ、ナングシ、ナング」などが考えられる。本稿では使用数の多い前者のみ言及する。

なお、データは google の検索結果上位200件から行った⁶。以下表記のない例は検索結果からの引用である。

3. 1. ナングカラ／ナンナノデ

「ナングカラ」の「カラ」は、前件が原因・理由であることを表す。ここでは「ナンナノデ」の「ノデ」もその違いを見出せないため同じものとして扱う。

「ナングカラ／ナンナノデ」の前件に現れるものは、原則的によくないことと考えられる例に限定される。

(7) 僕としてはあれもこれもやりたいしっていう集まりなので、グランジっぽい
ルーズな感じの曲を書いて自分のパブリックなイメージを壊してやろうとか、
でもそればかりでも何だから、ちょっと真面目な自分もやっぱりいるし。

(8) 彗星ばかりじゃ何だから、3月に入ってからは好天に恵まれる日が多いので、
最近たまに寒空の下で星空堪能してます。

(9) 更新がないのも何だから、というわけで変なものでも載せようかと思えます

w

(7) では前件で「パブリックなイメージを壊す」というネガティブな要素では問題があるということを表し、(8) では彗星だけで他の星を見ていないこと、(9) は更新しないということが問題であることを表す。このように、前件としてあらわれるものはよくないことで、それを「ナニ」という言い方で表していることが見てとれる。

指示語との置き換えテストであるが、「ナングカラ／ナンナノデ」は「アレ」を代入することは可能であるが、「ソレ」などのソ系列は入らない。

(10) 紹介だけでは {何／あれ／*それ} だから自分で購入してみた。

(11) 電話やメールじゃ {何／あれ／*それ} だから直接顔見て伝えたいです♪

(12) 先日死んでしまったお隣の猫のアっちゃんの為に何かしてやりたい。写真を
A4でプリントアウトし、額に入れて飼い主にあげようか、と思い立ちまし

た。

それだけでは {何／あれ／*それ} なので、額を自力で作る事にしました。

ここで「アレ」で置き換えた場合の意味機能の違い、「ソレ」が用いることができない理由については4章で扱う。

その他、「～(するの)も」、「～～じゃ」「～では」「～でも」に後接する例が多くみられる。前件をそのまますることを仮定して、それではよくないということを表すということが見て取ることができる。

3. 2. ナンダッタラ

「ナンダッタラ」は一部の辞書に立項されている。

大辞林第三版

相手の気持ちを尊重するという意志を示すときいう語。何なら。

①お望みならば。「——私から頼んであげよう」

②おいやならば。「別々に行くのが——，一緒に行ってもいい」→なんなら

日本語大辞典第二版 (用例省略)⁷

相手の意志をうかがいながら、一つの判断を示す時にいう。都合によっては。その方がよかったら。

後者の語釈は意味的な面では適切であると思われるが、指示的な機能についての言及はなされていない点が不満足である。以下、指示性まで含めた上で考察を行う。

「ナンダッタラ」の「タラ」は仮定条件を表す。

(13) 嵐・二宮和也、本音を吐露「現場の空気をよくするためにゴマだってる。

何だったらペーストになるぐらいまでする」

(14) 「ラーメン食べたいっ!」、「何だったらギトギト系のあの店まで行っちゃう?」

(15) 先日、児童室で「暑いので子供に水を飲ませてもいいでしょうか。何だったら階段のところへ出ますが…」とお客さんに言われた。

(13) では「前件では不十分であるなら」ということを表す。(14) では「ラーメンを食べる=太る」ということを前提とし、「どうせラーメンを食べるなら」と考えられる。

(15) は「もしここで問題があるなら」ということを表す。これらを見ると、前件を仮定条件とし、後件の判断を下すものであると考えられる。

指示語との置き換えテストであるが、「アレ」以外にも、「ソレ」で置き換えられる例もある。また「ソウ」で置き換えができ、「アア」が入らない例も存在する。

(16) 「いえー、多分大丈夫だと思いますよ。紹介してくれた先輩に報告してますし、{何／それ／あれ} だったらそのツテで本人に“忠告”してもらいますし」

(56)

(17) え……アラフォースたんって孤児だったのか…… {何／それ／あれ／そう／
*ああ} だったら僕ちゃんが引き取っていたのにいい！！

(16) は指示語に置き換えると、明らかに文の意味は変わるが、一応代入可能である。

(17) は「ソレ・アレ」を入れる場合は (16) のように意味の違いは生じる。更に「ソウ」という副詞を入れることはできるが、「ああ」は入れることができない。

3. 3. ナンナラ

「ナンナラ」も国語辞典に連語として立項されている。

大辞林第三版〔「なになら (何)」の転〕

相手の気持ちをおしはかっていう語。

①必要があれば。お望みならば。「——お教えしよう」「——中止してもよい」

②差し支えることがあるなら。おいやならば。「ここが——、よそへ行こう」

日本国語大辞典第二版 (用例省略)⁸

(「なん」に助動詞「なり」の未然形「なら」が付いてできたもの)

(1) 相手の意志・希望にかなうかどうかを、うかがう気持を表わす。もしよければ。都合によっては。

(2) 相手の意志・希望にかなわないことを仮定する気持を表わす。お気に召さないなら。駄目でしたら。

「ナンナラ」は聞き手前提指示用法の「ナニ」の中では比較的古く、初出例も江戸期にさかのぼることができる点は注目できるが、本稿では共時観点からの考察に留める。

「ナンナラ」は「何+なら」と分類されるため、まず「ナラ」について検討してみたい。

「ナラ」は仮定条件を表し、前件を仮定し、後件にその仮定に基づく判断や自分の意志・依頼などを表す (蓮沼ほか2001)。ここでの「ナラ」は仮定条件になっているのだろうか。

(18) しょうがねえな、何なら合わせてあげますよ GAME 特集とやらに！

(19) 「ゴールが決められるなら鼻でも胸でも体のどこに当たったものでもいい。何なら“ケツ”でもいいです」

(20) ももクロ子供祭りは何なら当日東武まで行って現地でチケ探勢いだ。

ここでも「ナニ」が定対象であるとするならば、その前件は明示されない。(18) は明示されていないが、「相手 (読み手) が希望するなら」という仮定条件を示している。これは現行の辞書の語釈とも合致し、更に条件表現の「ナラ」とも合致する。しかし

(19) はゴールを決めるためならどこに当たっても良く、極端な例として「ケツ」を挙げるために「ナンナラ」で示している。(20) は「ももクロのライブチケットは手に入りにくい。一般で手に入れることができない場合、最終的に極端なことをしてでも手に

入れる」ということを含意している。(19) (20) の例では仮定条件こそ含まれているが、日本語大辞典のような「相手の意志・希望」は含まれない。

このように、前件を受けていることは確かであるが、そこでの前件は明示されることもあるが多くは明示されず、推論によって仮定されるものまで含まれる。この「ナンナラ」の意味は、前件を仮定し、そのようなときは後件のような本人が希望しない、あるいは一般的に考えられないことにつながるものである。

「ナンナラ」の例では「ソ・ア」による代入は不可能である。ここで代入可能なものは、推論できるものごとのみである。

(21) 第2回WBCは行われるのか？ {何/*これ/*あれ/もし行われる} なら日本主導でどう？

(22) あら、こんなショップカードだったらすぐに捨てたりしないし、家に持って帰ってチーズ削るときにも大活躍しそうだし、{何/*これ/*あれ/極端な使い方} なら常に財布の中に持ち歩いて、いつでもチーズを削れる準備の良い気の効く人として一目置かれそうじゃないですか。

(23) 「何とか短くしなきゃ」という強迫観念にとらわれているこの頃、気晴らしにこんな他愛もないものを書いている。許してくれ。{何/*これ/*あれ/もし不必要} ならこのエッセイも削除してくれ。

これらはどのような指示語でも置き換えられない。つまり、「ナンナラ」で示されているものは、定対象ということではできないのである。このように指示語での置き換えができない理由として、慣用的に「ナンナラ」が用いられ、その意味機能がすでに一語化したものと判断できるからであろう。このようにその他の指示語を代入できない「ナニ」はその他の「聞き手知識前提用法」の「ナニ」には現れない。

3. 4. ナンダガ

最後に「ナンダガ」を検討する。ここで現れる「ガ」は話題を導入したり転換したりするガであると判断できる(野田1996)。以下見るように「ナンダガ」の例は慣的な例ばかりで、意味が固定されているものも多い。

(24) 私が言うのも何だが、私たち夫婦は人も羨むような、たいへん仲の良い夫婦だった。

(25) こんな時に何だが、海外旅行保険比較なんてしてみる。

(26) 懐かしい投稿で何だが……、ツンデレ好きだ！！

この「ナンダガ」は、後件を述べるのに憚られ、「それを言うのも憚られるが」という意味を表す前置きの用法であると判断できる。

「ナンダガ」は「アレ」とかなり類似した意味で用いることができる。

(27) こう言うては {何/あれ/*それ} だが、平成27年は無理っぽいな…26年大丈夫

(58)

夫か？

(28) こんなとこの書くのも {何／あれ／*それ} ですが、amebaにはログインできるのです。

(29) 立地は {何／あれ／*それ} ですがなかなか美味しいです。

ここまで見てきた指示語との置き換えテストでは意味の相違は現れるが代入可能であったのに対して、ここでは「アレ」で表しても先の例のような意味の差は生じない。これはア系列の指示詞の機能が関係すると考えられる。詳しくは4章で述べる。

また、「ナンダガ」に前接するものは、例文で挙げたもののほか、「書くもの(のは)、こう言っちゃ、突然で」などに「ナンダガ」が接続する形式が多くみられる。「ナンダガ」はその意味機能及び形態からも、文法化の仮定を経て一語化していると考えられる。

3. 5. 総合的検討

最後に、これらの用例について、「ナニ」の機能に注目して総合的に考察する。

まず、「ナニ」で示される対象は推論から導き出される現象で、具体的な事物を表す例はほとんど見られない。

(30) ふれぜんとだけってのも 何だから (=あまり良くないから) カード作ってみただけどそういえばクリスマスのメッセージって何書けばいいのかな？
(∴)w

(31) (ツユクサについて) 和え物、卵とじ、炒め物、何だったら (=使うとことが考えられないが、使うのであれば) ピザに使うなどアイデア次第。

(32) 晩御飯マック、アリです。何なら (=極端な場合であれば) 呑んだ後のシメにダブルマックセット。

上記の例のように、そこから導き出される意味は、文脈から類推できる極端なものごとであると判断できる。

また、これらの「ナニ」を用いる時は、「直接言うのが憚られる場合」であると考えられる。

(33) ここで正解をいうのも 何ですので、来週の授業の時に言います。(作例)

(34) 帰りたくないの？ 何だったらうちに泊まる？(作例)

(35) そんなひどいこと言うんだ。何なら、俺から注意しておこうか？(作例)

(33) はその場で正解を言うのが適切でないと判断した場合、(34) は「帰りたくないんだったら」というとあまりにも直接的すぎるために「ナニ」で婉曲的に用いた例、

(35) は「言にくい」ということを避けて「ナニ」を用いている。これらの例からもわかる通り、直接言にくいことを「ナニ」という曖昧な語によって避けることが読みとれる。

この二つの機能を総合して判断すると、「聞き手知識前提用法」のナニは以下のよう
に定義できる。

○ 〈聞き手知識前提用法の「ナニ」の機能〉

直接言うことが憚られるようなものごとについて、相手との共有知識を前提とし、
言いにくいものごとを相手の推論による判断に委ねる

このように定義すると、先に挙げた例も説明がつく。

(36) A: 今日、飲みに行かない。

B: 明日も飲むし、今日は何だからやめとくよ。(= 1)

(37) A: どーしよー、明日の発表準備、何もできてないよー。

B: 何だったら、少し手伝おうか? (= 2)

これらの例は (36) では事情を詳細に話すことを避け、相手にも理解してもらえ
ることを前提としている。(37) も「大変なら」と直接言ってしまうと相手に失礼である
と考え、相手の判断に委ねたものと判断できる。

このように「聞き手知識前提用法」は、具体的な指示先があるわけではなく、あくま
で「君にもわかるよね」というような聞き手の知識で判断してもらえ
ることを期待して発話されているのである。

4. 指示詞「ソ・ア」との対照

3. でみた一連の「ナニ」はソ・ア系列の指示詞で代入できる例がみられた。そこで
本章では指示詞の機能を概観し、ソ・ア系列指示詞と「ナニ」との機能の違いについて
言及したい。

4. 1. 指示詞「ソ・ア」の性質について

指示詞「ソ・ア」の性質については、談話管理理論をもととした田窪・金水の理論を
用いる(金水・田窪(1990、1992a・b)、田窪・金水(1996)、金水(1999))。

指示詞についての言及は田窪・金水(1996)に詳しい。田窪・金水は話し手の談話領
域をD一領域とI一領域の二つに分けている。

○ [D一領域とI一領域の定義] (p. 66)

D一領域: 長期記憶内の、すでに検証され、同化された直接経験情報、過去のエビ
ソード情報と対話の現場の情報とリンクされた要素が格納される。

直示的指示が可能。

I一領域: まだ検証されていない情報(推論、伝聞などで、間接的に得られた情
報、仮定などで仮想的に設定される情報)とリンクされる。

記述などにより間接的に指示される。

更にこの知識領域転移に対する制約を設け、この理論の肉付けを行っている。

(60)

○情報転移制約：(p. 66)

I—領域内の要素はその要素が設定された談話セッション中はD—領域に移すことはできない。

これらD—領域とI—領域の区別は「基本的には属性による絞り込みなどによらず直接指示できる対象(対話現場にあって、指差しなどで指示できるか、記憶の中にあり過去のエピソード内の対象であるのか)、その対話内で初めて呈示され、属性が対話内でのみ設定されているような対象の区別である」とされる。つまり、相手との知識の共有が指示詞選択の決定要素であることは黒田(1979)などと同一であるが、その決定要素に規約を設けたのが談話管理理論から見た指示詞の検討である。

このD—領域、I—領域の区別から、ソとアの指示詞を以下のようにまとめている。

○[談話管理理論から見た指示詞の定義](p. 72)

①ア系列指示詞：D—領域を検索範囲として、指示対象を検索せよという標識

②ソ系列指示詞：I—領域を検索範囲として、指示対象を検索せよという標識

長期記憶にある情報、つまり相手と共有できる(であろう)情報を指示する際は「ア」を用い、共有できないであろう情報を指示する際は「ソ」を用いるとすることができるのである。

4. 2. 指示詞と「ナニ」の違い

それでは、3章でみた「ソ・ア」による代入は談話管理理論上ではどのように判断されるだろうか。以下、掲載した例から検討する。

(38) 紹介だけでは {何/あれ/*それ} だから自分で購入してみた。(=10)

(39) 電話やメールじゃ {何/あれ/*それ} だから直接顔見て伝えたいです♪ (=11)

(40) 先日死んでしまったお隣の猫のアっちゃんの為に何かしてやりたい。写真をA4でプリントアウトし、額に入れて飼い主にあげようか、と思い立ちました。

それだけでは {何/あれ/*それ} なので、額を自力で作る事にしました。(=12)

(41) 「いえー、多分大丈夫だと思いますよ。紹介してくれた先輩に報告してますし、{何/それ/あれ} だったらそのツテで当人に“忠告”してもらいますし」(=16)

(42) え……アラフォースたんって孤児だったのか…… {何/それ/あれ/そう/*ああ} だったら僕ちゃんが引き取っていたのにいい!! (=17)

これらの例ではソ系列・ア系列を用いると、明らかに意味が異なる。ここで「アレ」を用いると、3. 5で示した相手の推論を意識したものではなく、D—領域を前提とし

ていることになる。つまり、相手の共有知識が前提となるため、「前件の条件であれば私が考えていることと同じことを聞き手も理解できるでしょうが」というようなものとなる。そのため、聞き手には自分と同等の理解がなされるであろうということとなってしまふ。ここで用いる「あれ」は観念指示的な用法で、以下の「アレ」と同じものである。

(43) <Bにホーロー鍋を取ってもらいたいが、その名称が思い出せず>

A: ちょっと、あれ取って。

B: 「あれ」って何よ!

この「アレ」は、具体的な事物は頭に浮かんでいるが、名称を忘れてしまった時に用いられる。ここで「アレ」を用いるのは、聞き手と共有している知識を前提として、名前を忘れてしまったが聞き手にはわかるだろう、という期待から発せられるものである。そのため、聞き手のD-領域から探索できなければ、その会話は例のように成り立たなくなる。

「ナニ」は聞き手の知識で判断してもらえることを期待しているが、具体的な事物を指し示すものではない点と、相手に正確に伝わることを前提としていない点が「アレ」とは異なる。そのため、ここでの「ナニ」と「アレ」は厳密には指示性が異なるのである。

そして「ソレ・ソウ」が代入できる(41)(42)の例であるが、ソ系列が代入できる時は、前件内の語句を指し示すことができる場合のみである。(41)は「とある問題について先輩に報告している」という文脈で、「それでも解決しない」ということを示す。

(42)は「孤児である」ということを指し示している。このように、前方コンテキスト内に指示対象が見出しにくい時は、ソ系列で指し示すことができない。つまり、ソ系列が「ナニ」に代入できるのは、前件に文脈があり、かつそれを前提条件として発話される時にのみ用いられるという、極めて限定的かつ偶然的なものであると言えよう。

最後にほぼ置き換え可能であると判断できる「ナンダガ」について検討する。

(44) こう言っては {何/あれ/*それ} だが、平成27年は無理っぽいな…26年大丈夫か? (=27)

(45) こんなとこの書くのも {何/あれ/*それ} ですが、amebaにはログインできるのです。 (=28)

(46) 立地は {何/あれ/*それ} ですがなかなか美味しいです。 (=29)

これらの例で「アレ」が使用できるのは、前件が慣用的である点と関係している。「こう言っては」「書くのも」「立地は」と前件の情報から、「アレ」を用いた時にネガティブな内容であるということがD-領域内から判断できるためである。これは以下の例も同様である。

(47) <とある人物の変な発言を聞いて、指先を頭の所で回しながら>

(62)

あいつ、アレだよ。(作例)

(48) あの人の性格はアレだから、何言っても無駄だよ。(作例)

(47) は指先の動作を指していると考えられることもあるが、あくまで指先の動作は付加情報であり、あくまで相手には眼前の人物の頭がおかしいということを表している。それをア系列で表すのは、「そのような言動を行う人は非常識な人である」ということが共有できるであろうという前提である。(48) も聞き手が自分と同様の見解をすることを考えられることから「ア」を用いている。

このように、これらの「アレ」から、アレのみで指し示す場合はネガティブなものであるということが前提となる。

ただし、この例も D—領域が前提となるため、相手に伝わらない可能性もある。その可能性が「アレだが」の場合は比較的低いだけだと言えよう。

5. まとめ

以上のように「ナニ」を見てきた。本稿での結論をまとめると以下の通りである。

- 1：尾上 (1983) で呼ばれる「定対象指示用法」は、定対象を指し示す場合と聞き手との共有知識を前提として発話する「聞き手知識前提用法」の2つに分けられる。
- 2：聞き手知識前提用法の「ナニ」は、直接言うことが憚られるようなものごとについて、聞き手が持っているであろう知識を前提とし、言いにくいものごとを聞き手の推論による判断に委ねる用法であると言える。
- 3：聞き手知識前提用法の「ナニ」は指示詞ソ・アが代入できる例もあるが、それはあくまで「代入可能」であり、「ソ」で表すときは前方照応の意味しか有さず、「ア」で表すときはD—領域にあるものと認識できる時で、意味的には全く別物である。

最後に、このような指示的性質をなぜ「ナニ」のみが受け持つのかという疑問が残る。この問題に関連して、奥津 (1985)⁹ で不定語「なに」について以下のように記されている。

「だれ」は人、「どこ」は所、「いつ」は時のような意味素性を持っているが、「なに」はそれ以外の名詞を指示する。したがって、人以外の生物や、無生物、抽象物、などなど広い範囲を含む。(奥津 (1996) p. 164)

ここで、奥津は「広い範囲を含む」と述べている¹⁰ が、その中で「抽象物を含む」という点から、この機能を有するヒントを見出せそうである。今後検討したい。

残された問題として、3章でふれたようなその他の「ナニ」の機能および指示語との関連性、このような「ナニ」の機能がいつから生じたのかを通時的観点から検討することがあるが、今後の課題としたい。

【付記】本稿は第185回青葉ことばの会での口頭発表「定対象指示用法「ナニ」の指示性について」（2013年6月 於明治大学）を加筆修正したものである。発表時にコメントを頂いた先生方に御礼申し上げます。

また、本稿のもととなった拙稿（2005）は、故長嶋善郎先生にご指導いただいた。当時の発表で指摘を受けたうえで生まれた本稿の原案をご指導いただいたにもかかわらず、執筆に8年も要してしまい、先生の生前に本稿を完成できなかったことが悔やまれます。先生の墓前に本稿を捧げます。

注

- 1 本稿での引用は再録された尾上（2001）による。
- 2 本稿で現れるD系列を示す「不定語」は尾上（1983）、西垣内（1997）の定義に従うものとする。また、奥津（1984（1996に再録））では「不定詞」と表される。その他「疑問詞・疑問語」ということもある。
- 3 この結果および例文の許容度については、筆者の判断が主であるが、許容度が揺れるであろう例については、筆者の授業を履修している学生合計約100名に挙手で確認した。I'について筆者は許容できないが、約半数は上記のような理由で許容した。
- 4 <引用中「某」項指示用法>は省略する。
- 5 ここでは普通形のみ取り上げているが、たとえば「ナングカラ」には「ナンデスカラ」のようなデスの形式も含める。
- 6 2013年6月12日に検索。検索対象は「ナングカラ」の場合、「なんだから／何だから／何ですから／なんですから」をそれぞれ上位200件ずつ、計800件を検討した。他の例も同様の検索を行った。
なお、上位200件の中には「いい大人何だから我慢しなさい」のような漢字の当て方の間違いや、「何なら日本は勝てるの？」のような疑問の例が多く含まれていた。
- 7 日国の初出例としては高見順「故旧忘れ得べき」（1935～1936）を掲載しているが、筆者が調べた青空文庫の例を見ると、それより古い例は多くある。
- 8 （1）の初出例は「東海道中膝栗毛」（1802～1809）、（2）では「浮世風呂」（1809～1813）を掲載。
- 9 本稿での引用は再録された奥津（1996）による。
- 10 ここで述べる「範囲の広さ」について奥津（1985）は「どっち・どちら」のほうが範囲の広い語としているが、「なに」は前提集合を必要としないこともある点で違うと考えている。

参考文献

- ・奥津敬一郎 (1985) 「続 不定詞の意味と文法」『人文学報』No. 173 東京都立大学 (奥津 (1996) に再録)
- ・———— (1996) 『拾遺 日本文法論』ひつじ書房
- ・尾上圭介 (1983) 「不定語の語性と用法」渡辺実編『副用語の研究』(pp. 404-431) 明治書院 (尾上 (2001) に再録)
- ・———— (2001) 『文法と意味 I』くろしお出版
- ・金水敏 (1999) 「日本語の指示詞における直示用法と非直示用法の関係について」(『自然言語処理』Vol. 6 No. 4 pp 67-91) 自然言語処理学会
- ・金水敏・田窪行則 (1990) 「談話管理理論から見た日本語の指示詞」『認知科学の発展』3 (日本認知科学会) pp 85-115 講談社 (金水・田窪 (1992a) に再録)
- ・金水敏・田窪行則 (編) (1992a) 『日本語研究資料集 指示詞』ひつじ書房
- ・金水敏・田窪行則 (1992b) 「日本語指示詞研究史から／へ」(金水・田窪1992a)
- ・黒田成幸 (1979) 「(コ)・ソ・アについて」『林栄一還暦記念論文集・英語と日本語と』くろしお出版 (金水・田窪 (1992a) に再録)
- ・田窪行則・金水敏 (1996) 「複数の心的領域による談話管理」『認知科学』No. 3, Vol. 3 pp. 59-74
- ・竹内直也 (2005) 「定対象指示用法「なに」の指示的性質について—ア系指示詞との対照—」『日本語学会2005年度春季大会発表予稿集』pp. 71-78 (於 甲南大学)
- ・西垣内泰介 (1997) 『論理構造と文法理論』くろしお出版
- ・野田尚史 (1996) 『「は」と「が」』くろしお出版
- ・蓮沼昭子・有田節子・前田直子 (2001) 『日本語文法セルフマスターシリーズ7 条件表現』くろしお出版